



関西学院大学リポジトリ

Kwansai Gakuin University Repository

2018年度活動報告 CJP授業：インディペンデント スタディ 文法・読解プレ1・1

著者	蔭山 拓, 郷矢 明美, 瀬井 陽子
雑誌名	関西学院大学日本語教育センター紀要
号	9
ページ	40-40
発行年	2020-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028532

2018 年度活動報告 CJP 授業： インディペンデントスタディ 文法・読解プレ1・1

蔭山 拓・郷矢 明美（関西学院大学日本語教育センター）

瀬井 陽子（大阪大学国際教育交流センター）

1. クラス概要

本クラスは秋学期に日本語レベルプレ1～1（初級前半）を終了した学習者を対象とする。今学期の受講生は①②クラス合計14名（プレ1レベル5名、1レベル9名）であった。クラス目標は「文法・読解について自分で学習目標を設定し、そのための学習計画を立て、実行できるようになる」である。1週間のコマ数は3コマで、使用教材は教師と相談の上、必要に応じて各学生が準備することとした。

2. 授業内容

初めに秋学期の日本語学習を振り返り、文法・読解について、自分の課題を把握する時間を設けた。その上で、課題を解決するために、教師と相談しながら日本語の学習計画を立て、実行した。今回実際に設定された学習目標は、秋学期の復習（漢字学習を含む）と春学期の予習が大半であったが、その他、漫画を1冊読む、日記を書く、日本語能力試験（N3）の受験勉強といったものもあった。基本的に学習時間内の活動は「学習ノート」に書き込み、毎回の学習記録とした。

また、1週間に1回振り返りの時間を設け、学習の成果報告や教師や他の学習者との意見交換を行った。学習者にとって新たな学習方法やリソースを知り、自分の学習方法を振り返る時間とした。最終日には冬学期全体の振り返りも行った。

3. 成果と今後の課題

新たな試みとして、学習使用教材を自由にしたことで学習者の主体性がより尊重され、また教師側も学習者個々の学習により柔軟に対応できるよう心掛けた。一方で、学習活動における学習者の主体性の尊重に関連して、学習者が学期を通じて自身の学習を記録した「学習ノート」を分析すると、学習の進め方に大きな違いがあった。秋学期の復習と予習といった同一の学習目標であっても、語彙（漢字を含む）や文型の意味の理解や変換練習に注力している学習者と、短文作成や日記を書くといった産出活動を中心に進めている学習者が見られた。ピリーフとも思える個々の学習者が持つ言語学習観に対して、教師としてどのように働きかけをすればいいのか今後の課題としたい。